

第2回「泉大津市オリアム随筆賞」

【優秀賞】

目覚めよドレス

藤井規子・愛知県

一目惚れだった。大英断をして買ったロングドレス。こげ茶をベース色にして赤・黒・白の幾何学模様が入っている。肘近くまでの優雅なフレンチスリーブ、スカート部分は大きなボックスプリーツがゆるやかに入り、裾に大きなボーダー柄。歩くと、プリーツの中にある黒地の模様が見え隠れする。地味な色合いのだが、品の良い華やかさがあつた。

すこし得意げに母に見せると、「その金額を出すなら、洋服ではなくて次の代まで着られる着物が買えたのに」と言われ、少しだけ後悔の念が頭をもたげていた。

でも、そのドレスは大活躍した。友人の結婚式などで三度着用し、そのたびに「素敵なおドレス」と褒められた。ただ、活躍が数年間だけのことだったことも、悔しいが認めざるを得ない。後は長く、クローゼットにおさまったままになってしまった。そのことも、着物でも着るのは数回だけだし、と負け惜しみのように自分を納得させていた。

五年ほど前、娘が「披露宴に出席するんだけど、着られそうな洋服を持っていない？」と、私のクローゼットを物色していた。

娘は以前から、母親の箆笥の中身は自分のものでもある、とばかり、私が娘時代に着た浴衣や卒業式の袴に合わせる着物など、よく引っ張り出して着ていた。私より身長も体格も少し大きめではあつたけれど、腰ひもの位置を調整して、帯をモダンに締めれば、今時の流行の柄ではないものが、かえって目をひき、「珍しい柄でステキね」と友だちに言われ、娘は鼻高々だった。たぶんその延長で、フォーマルな洋服も、と考えたのだろう。

何着か娘時代に着た洋服を出して見せると、娘は目の色をかえて、「これがいい！」と、あのロングドレスを手にした。ところが、「でも、こんな長いドレスは、会場で浮いてしまう。それに、このウエストの細さはナニ？お母さん、本当にこれを着たの？」。

学生時代に食欲最優先で過ごした娘と、中年になってウエスト回りに肉がついた私は、顔を見合わせて笑った。洋服は、デザインの流行や、サイズの制約があつて、世代を超えて着られないのだと、心の中に残っていた母の言葉が、消えないシミのように再び浮き上がってきた。「ホント、誰にも着られないドレスだね」と言いながら、それでも、購入した時の金額を思うと惜しくて、思い切つて処分する気持ちには、どうしてもなれなかった。

細身のドレスに触発されたのか、娘は一念発起し、ダイエットを始めた。「お母さんの昔の体重は？」と、対抗心むきだしで、カロリー計算と運動に心掛け、一年あまりで体重を十キロほど減らすことに成功。ちょうどそのころ、良い人に巡り会い、トントン拍子で結婚が決まっていた。

娘に、結婚式のドレスを一緒に選んでほしいと言われて、同行した。「痩せられたから、サイズを気にしないで好みのデザインのドレスが選べる」と、娘は試着を楽しんでいた。そして選んだのは、シンプルで品のいいドレス。母娘ともに、大満足だった。

問題は、お色直しのドレスだった。娘は、「この色はA子が着たし、この色はB子……」と、友人のお色直しのドレス姿が思い出されるらしく、決めかねている。なんとか一着は仮予約をしたものの、表情はサエない。帰りの車の中で、娘はポツリと言った。「お母さんのあのドレス、着ようかな」と。

あのドレスを？ 私招待客として着たものだから、花嫁にはどうかしら、という言葉がグツとのみこみ、「彼が賛成してくれたら、そうしなさい」と答えていた。

帰宅するとすぐ、娘はドレスを着てみた。それはピタリ身体に合い、よく似合っていた。地味な色目が、逆に顔映りを良くしていて、想像以上に美しく映える。そんな娘を、言葉もなく見惚れてしまった。そして、試着室でこのドレスを着てみたときの、鏡の中の別人のような自分を見て心が浮き立った、過去の自分と娘の嬉しそうな顔が重なるような錯覚を覚えていた。

ちょうどその時、娘のダンナ様になる人がやってきた。ドレスのまま階段を下りていった娘を見た瞬間、彼は「可愛い！」と叫んでいた。「お母さんのドレスだけど、お色直しに着的いい？」と問う娘に、以前、娘と一緒にドレスの下見にしている彼は「今まで見た中で一番いいよ。どこにもないような、ステキなドレスだね」と賛成してくれた。

彼は続けて言った。「このドレス、どこも傷んでいないし、大切に保管してあったことに、一番感心しました。僕たちに女の子が生まれたら、その子にも着せられますよね」――。

三十五年前にこのドレスを選んだ自分を、初めて文句なしに自慢に思った瞬間だった。